

# 知っている・分かるとはどういうことか？

## ～概念の問題～

幸福を求めるのに重要なのはキモチの問題で、情緒的な話で問題解決できればいいのですが、理論的な裏付けのない話は道理を外れやすいのです。なのでここでは論理的に考えるために知的な問題から考えていこうと思います。ただ、ややこしい話は分かりにくいですね。私も分からないことだらけのところから始めました。未だ分からないことは沢山あります。ではそもそも「分かる」というのはどういう事でしょうか？



### 一匹の猫

あなたの目の前に「猫」が一匹寝ています。あなたはそれが「猫」であることが分かります。それは「うさぎ」ではなく「犬」でもなく「猫」なのですが、あなたは「猫」という“概念”を記憶の中に持っているからそれが分かるのです。

### ウーパールーパー

あなたの目の前に何か見知らぬ生き物います。あなたはそれぞれを初めて見たのでそれが何ものか分かりません。しかし、頭があって手足があって動いているので、何か動物だろうとは推測するのです。「動物」には頭と手足があって動くという“概念”を記憶の中に持っているから推測できるのです。そしてそれが「ウーパールーパー」だと教わった時に、あなたの記憶の中に「ウーパールーパー」という“概念”が出来上がります。(どうでもいい話ですが、実はウーパールーパーという名前は愛称みたいなもので正式には「メキシコサラマンダー」というそうです。)

### 分かる

★概念というのは一人一人が記憶の中に持っているものです。今体験している事柄を、自分の中の概念と照らし合わせて一致するところに振り分けることを“分かる”と言います。

★一致する概念が見つからない時には、今持っている概念とどういう関係になるか、位置関係を振り分けることで“分かった”と感ずることが出来ます。

### 概念

“概念”とは普段あまり意識しませんが、誰でもが持っているものであり、毎日活用している日常的に無くてはならないものです。

“概念”の概という文字は「木」と「既」に分けることができます。「木」は枠組みのような構造を表し、「既」は「すでに」ということです。「念」というのは考えや思いのことをいいます。つまり「そのとき既にある構造的な考えや思い」ということです。昨日初めて知ったことでも、知った次の瞬間には既に“概念”として活用されます。

個人の概念は日々拡大してゆくものです。概という文字は“おおむね”という意味にも使われます。詳細・厳密な定義をするものでもありません。

“概念”の在処は人の記憶の中なものですから、具体的に見て説明がつくものではありません。そのため発生や構造について『思考心理学』や『認知言語学』などが考察し、哲学においても『認識論』に絡んで大いに議論されているものでもあります。

## 概念の構造 - 集合的構造

右に簡単な図を書いてみました。“集合”の図は“ベン図”と言いますが、丸がどこか重なっていないといけない気がしますが概念を考える時には重ならない方が分かりやすいので重ねない例です。もちろん、概念上でも重なった構造（集合では“共通部分”と呼ぶところ）も十分考えられます。

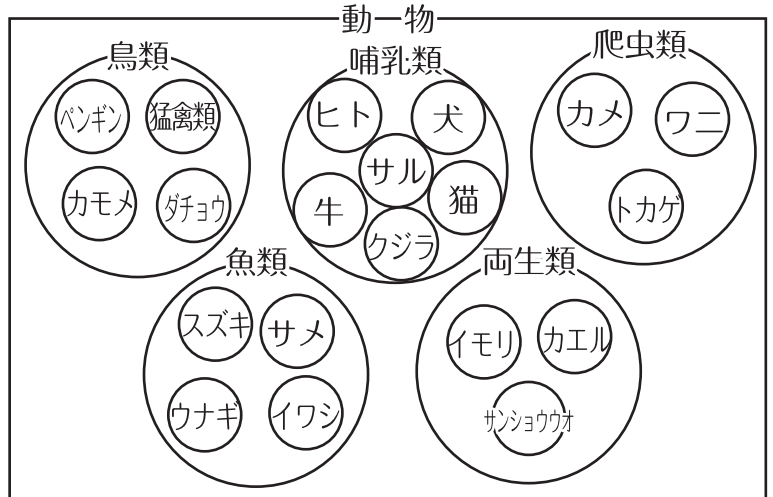
注目してほしいのは階層的な構造、そして“内包”と“外延”、です。

★「動物」という集合の中に「鳥類」、「哺乳類」などが含まれています。「鳥類」、「哺乳類」は「動物」という集合の“部分集合”だと言えます。「ペンギン」「猛禽類」「カモメ」「ダチョウ」は「鳥類」という集合の“要素”と言えます。このように集合は階層的構造を持っています。

★「動物」というのは「鳥類」、「哺乳類」の“上位概念”です。「鳥類」と「哺乳類」は“同位概念”と言えます。「ペンギン」「猛禽類」「カモメ」「ダチョウ」は「鳥類」という概念の“下位概念”と言えます。このように概念構造も集合と同じく階層的なのです。

★また、その集合の全てが共通して持っている条件のことを“集合条件”又は“内包”と言います。「動物」であれば「生きていて動き回るもの」とでもしましょう。これを心理学では個々の要素が共通に持っている特徴と捉えて“概念の内包”と表現しています。

更に、この図には書いていませんが「ヒト」や「犬」「猫」などの集合の中に私達は個別の人やペットの個体を思い浮かべることができます。“ベン図”にその“要素”の全てを書き込む事は困難ですが書ききれない全ても考慮されるべき対象です。心理学では“概念の外延”と表現しています。



## 概念の構造 - 関係性

右の図は「原子燃料サイクルの概念」、電気事業連合会ホームページよりお借りしました。

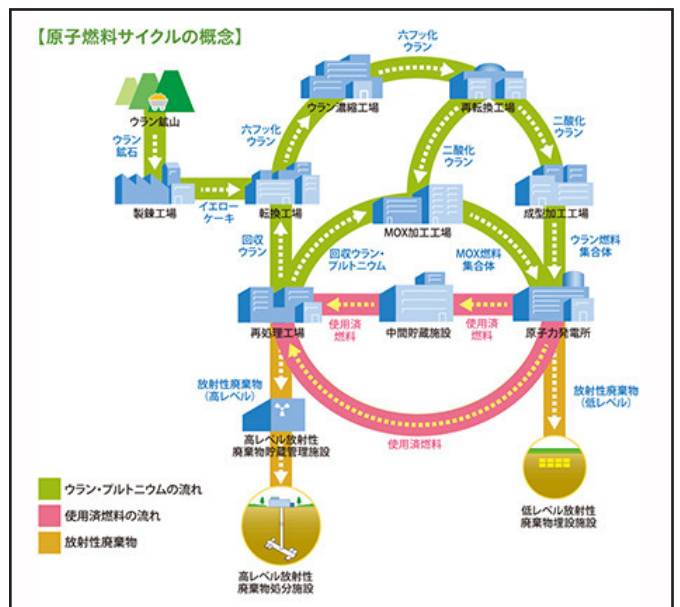
(<https://www.fepec.or.jp/nuclear/cycle/about/>)  
このように、個々の要素の関係性を示す図のことを“概念図”と呼びます。

矛盾なく整合性が保たれ、飛躍のない状態であることがルールです。

矛盾や飛躍に気が付かないこともあります。気付いた時には修正するのが必要で、修正できない時には概念は破綻します。また、見落とされた要素も関わりが出る物は追加しなければなりません。

原子力発電が始まったばかりの頃は放射性廃棄物の扱いが図の中でもっと小さかったと思います。実際ウラン燃料自体から廃棄される物は僅かです。しかし加工・発電される過程で放射能に汚染されて出る廃棄物が今や大問題になっていますので無視することができなくなりました。

個人の記憶の中に相互関係の繋がらない概念図は複数存在します。



## 具体的概念

個別の概念にはそれぞれ名前がついています。基本的には名詞として扱われているようです。「走る」という動詞であっても出来事・事柄としてその概念は存在していて、いざ自分が走る時にはあたかも誰かが走っている姿をイメージし、自分の身体を使って演じている様です。目に見える事柄であり、他の誰かと共通して確認できる概念は“**具体的概念**”と呼ぶことができます。具体的概念に相当する物事は比較的わかりやすいものです。具体的概念があるからには、それとは違う種類の概念があります。それは“**抽象的概念**”と呼ばれます。

## 「抽象」「概念」という概念

幸福・美・正義など、目に見える形になりにくい事柄についての概念を“**抽象的概念**”とか“**抽象概念**”と呼びます。ただし、この呼び方はどこでも通用するものではありません。もしかすると最近あまり使われていないかもしれません。

★私達の考えの中には確かに「幸福」や「正義」という具体的ではない言葉があって、その意味するところを知っています。だからこれは「概念」と呼ぶにふさわしいはずです。しかし、「概念」を定義するとき、一般に共有されるものという考え方をに入れる場合があります。そうすると、幸福や正義など、人によって考え方に大きな違いがあるものは「概念」から締め出されてしまいます。サクラLeafでは“**個人的概念**”として抽象的概念も概念として扱います。

★もう一つ「抽象」という言葉の使われ方も問題があります。

抽象という言葉の意味を調べてみれば「物事の特徴的な内容を取り出した考え」みたいな事になります。(実際にはもっと複雑な表現で書かれています。)抽象化して考えている人にとっては単純化ですが、その考えを聞かされる立場からは訳の分からない話になることが多く、「抽象的」と言えば「よく分からないもの」「難しいもの」になります。また、数字や「赤い」などの形容詞も抽象的と扱われる場合があり、言語生活の中では混乱する概念です。

★具体的ではないものは共通理解を得にくいものですが、「分かる」「分からない」の問題は共通理解の問題です。なぜなら、分からない事柄は私の外側での出来事についてであり、**外側の存在との間で共通した概念形成をすること**だからです。

## 概念の差が個性に繋がる

個々人は記憶の中に概念を系統立てて構築しています。集合的にも関係性的にも、一つの概念が単体で存在することはありません。特に関係性の構造は変化や道筋の推測に役立ちます。

人は自分で分かっていることを基準にして行動を決定します。例えば進路決定をするときには、自分で知っている事柄の中からしか、選択することができません。次に何を学ぶべきなのかも、概要を知らなければ深く知ろうとする選択をすることができません。

概念系の構築は人の個性の構築に直結しています。

同じように知っているようでも、概念の中にはそれを知る過程で環境的な要因を受けて好き嫌いの感情が織り込まれています。義務教育のように国民一律に同じことを学んだとしても、学習環境を全く同じにすることはできませんから、先生との相性とか学んだ時の自身の体調などの影響で、得手不得手・好き嫌いの情報を織り込んでいくことになります。そういったことが積もり積もって個人的概念は形成され、次に学習したり経験したりしようとする内容を選択しますから、それぞれの専門分野の概念は増え、興味の方向性は年齢を重ねるにつれ先鋭化されて行きます。概念系の構築は人格構築と一体だと言えます。この概念系がどのように構築され、どんな働きをするものなのかを知っておくことはとても有意義な事でしょう。



## 「知」を探求してきた人類史

分かるということはどういうことなのかを探求してきた歴史はとても古く、ギリシャ哲学には既に始まっています。プラトン（前5世紀）の「**イデア論**」ではイデア界と表現されていますが冷静に読んでみれば概念についての考察に見えます。中世スコラ哲学においては、聖書をいかに正当化するかの哲学であったため、「知」についての探求は停滞したように見えます。

近代には主観（概念・観念）と客観の一致の問題として扱われ、当時は現在とは逆に「客観」の方の存在が疑われていましたが、カント（18世紀）によって、客観は複数人で確認しあうことで存在を実証できるとされます。以降科学の発展により、一般には「客観」の優位性が増していきます。しかし、思想哲学の世界では、客観の确实性を巡っての議論は継続され、キルケゴール（19世紀）によって個人の内面の出来事（主観的出来事）として「実存」の問題が提示され、20世紀に「**実存主義**」の流行を生んでいます。フッサールの「**現象学**」は個人の主観の中に洗われる現象のみが存在し、「客観」を否定しています。また、「**構造主義**」は主観が社会的な影響を受けることを指摘します。

現在、主観に関わる問題としては思想哲学だけでなく、**心理学や言語学、脳科学**などがそれぞれに研究している事と、インターネット環境の発達により、個人が様々な主張を発信しているため混沌とした様相を呈しています。

## 感覚の探求

分かるということの以前に、何を分かるのかと言う問題があります。分かるというのは「主観」内部の出来事なのですが、これは「客観」側の問題とも感じられます。「客観」を扱うのは科学の分野のように思えますが、現代科学は西洋哲学で主観と客観が断絶した思考の上に成立しているため、「客観」については**東洋思想**の方が秀でた部分も見られます。「現象学」では「客観」を否定するに至りましたが、それでは私達は何を感じ取っているのでしょうか？これは「世界観」の問題にもなります。

## 自由な思考のために

概念系はそのまま「世界観」でもあります。「世界観」の問題について、現代日本のアカデミックな知識にこれらは登場しません。と、言うのは現代社会はいわば「科学信仰」に入り込んでおり、科学的ではない世界観を「非科学的」という言葉で却下し続けているからです。つまり「科学信仰」という概念系にはまり込んでいるのです。これは啓蒙思想の成せる業であり、啓蒙思想自体がキリスト教の独善的な概念に反発的であるため、啓蒙思想こそが正当であるという拘りに陥っているように見えます。この一方的な思考方法から抜け出すことが、今まで分からなかったことを分かるための鍵になります。

ただし、科学的世界観を完全否定してはいけません。それぞれが主張する正しさの根拠を理解しなければ、一か八かの選択になってしまいます。この根拠の理解のために、これまで人類が探求してきた内容を整理することと、そのために概念系の成立の仕組みについての理解が必要になってきます。実は同じことを主張しているのに言葉の違いだけということもあります。

理解のための検証は徹底した内省によって導き出します。これは「我思う故に我あり」と言った17世紀の近代哲学の父と呼ばれるデカルトが取った手法でもあります。彼は二元論の元凶とも呼ばれることもありますが、多くの人を知る哲学者です。デカルトの時代には未だキリスト教的一神論からの脱却が難しかったようで、神の存在証明で突き詰めきれなかった感があります。

歴史的背景は社会的背景を産み、その当時の思想家の考えに反映されます。これらの影響を排除して普遍的な正しさは存在できるのか回を追って見てゆきます。